

茨木市立 豊川中学校 茨木っ子グローイングアップ計画

令和元年10月作成

1

3年間の計画

	目標	平成29年度(2017年度)	平成30年度 (2018年度)	令和元年度 (2019年度)
中学校 ブロック 保幼小中連携	・基礎的な生活習慣の定着を進めていくとともに、様々な生活体験を通して心情豊かに、安心して過ごせる集団をつくり、遊ぶこと、体を動かすことが楽しいと思える子どもを育てる。 ・校区全体で、つながりを持って取組を展開し、一人も見捨てず、集団づくりと授業づくりの連携のなかで、全ての子どもたちが、違いを認め合い育ち合う集団をつくる。	●保、幼、小、中、高、大地域、連携の情報共有発信 ・小小交流を進める。 (6年同士の交流) (児童会交流会) ・共通実践を模索する。(同和教育や多文化共生教育) ・保幼小での段差解消に努め、職員同士が学び合う。(相互参観) 小プールの解放、給食交流 ・いきいきスクールを活用し、中学校の教員が小学校へ来校し、授業などを行う。 ・合同授業研での柱を再確認し、授業づくりを共に行う。	●保、幼、小、中、高、大、地域連携の具体的実践の定着化 ・小小交流会において各校の実践を共通化させていく。共通実践の具体化を進める。 ・委員会や行事における交流を増やし、小小の子どもの出会いから学びを仕組む。	●校区全体での連携推進 ・高校卒業時点を視野に入れ、豊かな進路選択ができるような、学力・生活習慣の定着。 ・成果と課題の分析。
確かな学力の育成	・聴きあい学びあう子どもを育てる	① 3校合同授業研の実施 ・6月(豊川中)10月(豊川小)11月(郡山小)2月(豊川中)7月(ビデオ研) ②授業づくり研修を、人権教育・支援教育・情報教育などと連携し展開する。ICT活用の研修も含む。 ③確認テストから学力データを経年で蓄積し、学年の特徴や学力を総合的に分析 ④中高連携を密に。キャリア教育の充実。(追指導) ⑤授業アンケート実施。子どもの授業内容の定着度合いや、授業づくりの重点課題を分析。また、全国学力・学習状況調査の結果分析もふまえて、子どもに必要な学力を授業でどう付けていくかを考える。 ⑥ユニバーサルデザインを取り入れた、授業の展開。生徒一人ひとりのつまずきは多種多様であるが、一人残らず授業に参加させ学びを保障する取組みを展開する。	①3校合同授業研究会の実施 ・年に5回、講師を招聘し実施する。 ・6月・1月豊川中学校 ・8月郡山小学校・豊川小学校の授業(録画) ・10月豊川小学校 ・11月郡山小学校 ②授業づくり研修を、人権教育・支援教育・情報教育などと連携し展開する。ICT活用に特化した研修も含む。 ③確認テストから学力データを経年で蓄積し、学年の特徴や学力を総合的に分析 ④中高連携を密に。キャリア教育の充実。 ⑤生徒による授業アンケートを実施し、定着度合、授業づくりの課題を分析する。また、全国学力・学習状況調査の結果も利用する。	研修の継続および改善を模索するとともに、生徒による授業アンケート、生活アンケート、全国学力・学習状況調査、スポーツテスト、校内確認テスト等を利用して、成果と課題を分析する。

豊かな人間性を育む	・一人ひとりの人権が尊重される社会の実現をめざして、考え、行動できる力を育てる。	①生活アンケート（年1回）・社会性測定用尺度（年3回）の実施。子どもの自己肯定感や自己有用感に関するデータを蓄積し、分析する。 ②体験型学習 校外学習や職業体験学習などの体験型学習を通して、仲間を思いやり協力する力や社会を構成する一員としての自覚を育てる。 ② 人権教育の展開 多文化共生学習や同和教育などさまざまな人権課題についての学習を深める。小中で連携し、系統だった学習が展開できるようにする。 ④道徳授業の推進 道徳委員会を中心に、指導案の練り上げを行う。 ⑤いじめ・不登校委員会の活動 SC や生徒サポーター等とも連携して、子どもの相談活動の充実を図る。	①～⑤を継続して行う。 ⑥成果と課題を分析し、次年度に引き継ぐ。	①～⑤を継続して行う。 ⑥ 成果と課題を分析する。 ⑦ 次年度に活かせるよう、取り組んだ内容については授業案等の成果物として残す。
健康・体力の増進	・基本的な生活習慣の確立 ・生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成	①4月新体力テストの実施 過去データと比較できるよう、業者へデータ分析を依頼する。 ②授業づくり 体を動かすことを意欲的に取り組めるように、授業の内容・方法を工夫する。研修にも参加し授業力向上に努める ③具体的な目標設定 目標や到達点を文章化することにより、継続的に取り組む体制を組織的につくる。 ④生活アンケートの実施 3食きちんと食べているかなど、食事・運動・休養が正しく行われているか検証、適宜面談等をおこなう ⑤部活動の活性化 生徒数減少にともない部活数を増やせないが、部活の活性化につとめる	・成果と課題の分析 課題は次年度へ。	・成果と課題の分析
支援教育の充実				

2

今年度の結果と取組みについて

(1) 全国学力・学習状況調査



国語

(領域ごと)

①話すこと・聞くこと

概ね良好な結果であった。

②書くこと

概ね良好な結果であった。

③読むこと

概ね良好な結果であった。

④言語事項

概ね良好な結果であった。

(問題形式)

①選択式

概ね良好な結果であった。

②短答式

概ね良好な結果であった。

③記述式

概ね良好な結果であった。

(無解答率)

概ね良好な結果であった。

(その他)

- ・もともと正答率の高かった設問 1三
- ・もともと正答率の低かった設問 2三
- ・もともと無解答率の高かった設問 1四
- ・もともと無解答率の低かった設問 10問中7問において無回答は0であった。

分析

(正答率の全国比が低いものを取りあげた)

3ー (意見文の下書きに書き加える言葉として適切なものを選択する)

- ・選択肢にある「たとえ・・・でも」、「いくら・・・でも」という表現の使い方(意味)を理解できていなかった。
- ・設問の一文を読めば、解答できる。しかし、一文の中に接続助詞(でも)が含まれ、一文が長くなっているために誤読が生じた。
- ・設問部分以前の内容とのつながりを理解できていない部分があった。

数学

(領域ごと)

①数と式

やや課題が残る結果であった。

②図形

概ね良好な結果であった。

③関数

課題が残る結果であった。

④資料の活用

やや課題が残る結果であった。

(問題形式)

①選択式

やや課題が残る結果であった

②短答式

やや課題が残る結果であった。

③記述式

やや課題が残る結果であった。

(無解答率)

概ね良好な結果であった。

(その他)

- ・もっとも正答率の高かった設問 7(1)
- ・もっとも正答率の低かった設問 6(2)、8(2)
- ・もっとも無解答率の高かった設問 8(2)
- ・もっとも無解答率の低かった設問 1、6(1)、7(2)、8(3)、9(3)

分析

(正答率の全国比が低いものを取りあげた)

8(2) (資料(ヒストグラム)の傾向をとらえ、説明の誤りを数学的な表現を用いて説明する)

- ・他の分野に比べて、ヒストグラムを活用する機会が少ない。
- ・資料から特徴的な部分を読み取ることが苦手である。
- ・自身の考えを数学的な表現を用いて説明することが難しい。

英語

英語

(領域ごと)

①聞くこと

やや課題が残る結果であった。

②話すこと

課題が残る結果であった。

③読むこと

概ね良好な結果であった。

④書くこと

概ね良好な結果であった。

(問題形式)

①選択式

概ね良好な結果であった。

②短答式

概ね良好な結果であった。

③記述式

概ね良好な結果であった。

(無解答率)

概ね良好な結果であった。

(その他)

・もっとも正答率の高かった設問	1(1)
・もっとも正答率の低かった設問	10
・もっとも無解答率の高かった設問	4
・もっとも無解答率の低かった設問など	21問中11問が1.9%

分析

(正答率の全国比が低いものを取りあげた)

4、10

・両者ともにリスニング後に適切な英語の文章を書くという技能統合型の問題であり、全国・茨木市ともに難しい課題であった。

・英語を用いて自身を表現する(話す・書く)学習は行っているが、条件つきで即座に解答するのは非常にレベルが高いといえる。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

H21年からほぼ横ばいの傾向が続き、H24年度以降は平均正答率が上昇した。昨年度は下降したが、今年度は回復した。無解答率についてはおおむね良好な結果であった。授業規律が確立され、意欲的に学習しているものの、全国的に正答率の低い発展的課題への対応力に課題が見られる。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

学力高位層は H24年より増加傾向が続き、H28、29年に最高値となったが、ここ2年は減少している。一方で、学力低位層は減少傾向が続いている。今年度は中間層が多いという傾向が強く表れ、エンパワー層は再び減少している。H19～H25年の厳しい時期と比較すると少なく、全体的な学力の底上げがはかられていることがわかる。背景として、小中の一貫した授業づくりの取り組みの成果があると考えられる。

学力向上に関する取り組み

①授業づくり研修

＜校区における年5回の授業研究集会の実施＞

校区の2小1中で、互いの授業を参観し、研究授業の指導案の練り上げや事後研究協議、講師による講評・講演を実施している。

＜校内研修＞

部会内で取り組み(研修内容)の確認、学年方針を確認、計画、実施を徹底する。また、取り組み内容の反省を毎回行い、次の計画を進める。四人班の活用・コの字は継続。

②授業研・教材研修などの校内研修の充実

各授業者が授業アンケートを実施し、生徒の生の声から自身の授業を分析し方針を練る。さらに、教職員でグループワークや他の教員の授業を参観するなど交流する機会を設け、組織的な授業改善につなげる。ICTの活用をはじめとしたユニバーサルデザインを取り入れた授業を展開する。ビデオ授業研(授業を撮影し、複数の教員でそれを視聴する)では、子どもがどこで学び、どこでつまづいているかを共有し授業づくりに活かしていく。

③学力向上に向けた取り組みの継続と新しい取り組み

自主勉強ノートを活用し家庭学習の習慣化を目指す。学習の手引きを年度当初の家庭訪問で配布する。読書タイム、昼学習会、放課後学習会を実施する。自主活動(生徒会活動)と連携し、生徒が考える学年の課題と改善の取り組みを実施する。習熟度、TT、分割授業等など少人数指導による基礎基本の定着と子どものペースに寄り添った指導を進める。学習サポーターとも連携し、子どものつまづきに対応する。府のHPにある問題や、いばらきっ子スタディを活用する。テスト2週間前に範囲と提出物の一覧を配布するとともにメールマガジンも送信し、保護者の方の協力もお願いする。今後も子どもの姿から、子どもに実態に応じた取り組みをすすめる。

④学力の各データ分析、考察、次年度の方針立て

1・2年生における国語・数学の確認テストの実施し経年比較を行う。自主勉強ノートや評定・テストなどの関係を分析し、取り組みを検証していく。

⑤低学力層の減少に向けた取り組み

協同的・探求的な授業づくりを進めるとともに、習熟度別学習の実施、ユニット制の導入(今年度は未実施)、新聞学習の計画的導入、補習学習の実施。全国学力・学習状況調査にて検証する。

⑥体力向上

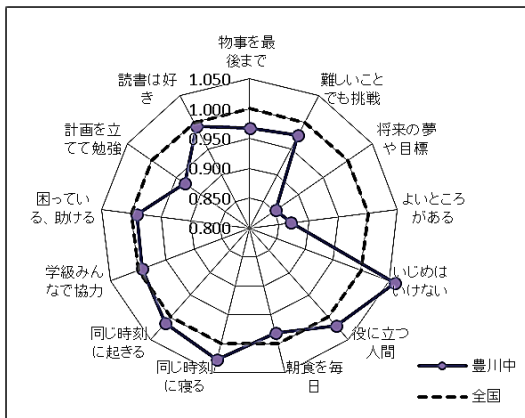
食育や体の発達など教科を通じて子どもの意識を高める。あいさつ運動やボランティア活動、部活動などの自主活動の活性化を図る。

⑦ゆめ力の育成

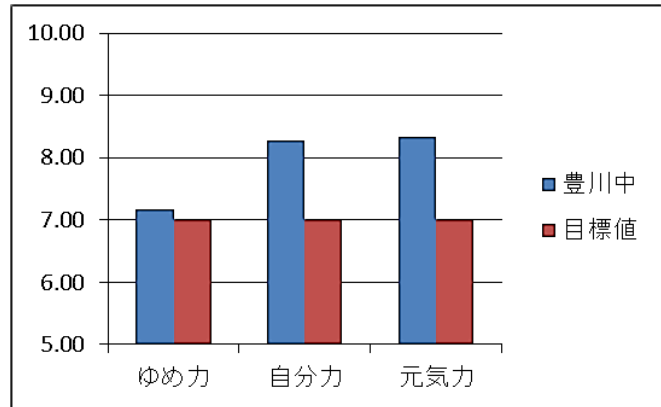
人権総合学習との連携。各教科でも集団づくりをすすめる。職業体験などを通じて自尊感情を高め、短・中・長期的な目標を設定していく。最後まであきらめない進路決定までのプロセスを構築する。

○●子どもたちに育みたい力●○

5つの力 全国平均との比較



5つの力 目標値との比較



今年度は、質問紙項目が大幅に変更になったため、5つの力をこれまでどおり産出することができません。そのため、全国平均との比較（レーダーチャート）は8項目、目標値との比較（棒グラフ）は自分力と元気力をのみとなっています。

分析

「学校の規則を守る」、「いじめはどんな理由があってもいけない」という項目に対して肯定的な回答が多く、規範意識が高い。また、「同じ時刻に起きる」など生活習慣に関する項目でも全国を上回る。課題としては、「自分にはよいところがある」という項目や「計画立てて勉強している」という項目に対する肯定的な回答の低さである（将来の夢や目標が未定の子どもたちも多いが、この項目は正答率との相関関係が全国的に見られない）。他者に対する温かい気持ちをもつ一方で、自主学習の方法がわからなかったり、克己心が弱かったりする部分を感じられる。

取組み

*「計画的を立てて勉強」の項目が低いことに対して

①自主勉強ノートのとりくみ

・自主勉強用のノートを配布し、生徒の取り組み(努力)に対するフィードバックを行ったり、学習方法を掲示したり、取り組んだページ数の多い者を表彰したりしている。

②テスト計画・学習実行表のとりくみ

・中間・期末テストの範囲や提出物等を、おおむね2週間前に配布し、かつ保護者にはメールの一斉送信で PDF 版を送付している。その上で、学習計画をたて、学習の実行状況を表に記入し、時間の使い方や自身が学習に必要な時間などを可視化させる。

③昼・放課後・長期休業中の学習会

・月曜日と金曜日の昼休みに、ICT(いばらき子スタディ等)も活用した自主学習を行っている。
・中間・期末テスト前に放課後学習会を行っている。3年生は部活動の引退後に、教員が支援できる日にも開催している。長期休業中にも学習会を開催している。

また、教科によっては、重要事項に対して再テストを実施し、達成感をもたせつつ、定着を図っている。

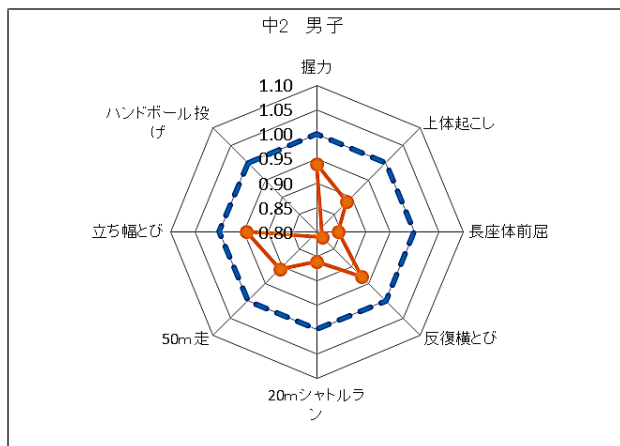
*「よいところがある」

・一人ひとりの学習を保障する(全員が学習に参加する)ことを目指し、「学びの共同体」ととりいれた授業づくりを中学校区で行っている。理解の高い生徒は説明することで学習の定着・深化を、苦手な生徒もつながりの中で、理解の促進をねらっている。個々の得意を生かし、個別では達成できない深い理解や関係づくりも目指している。

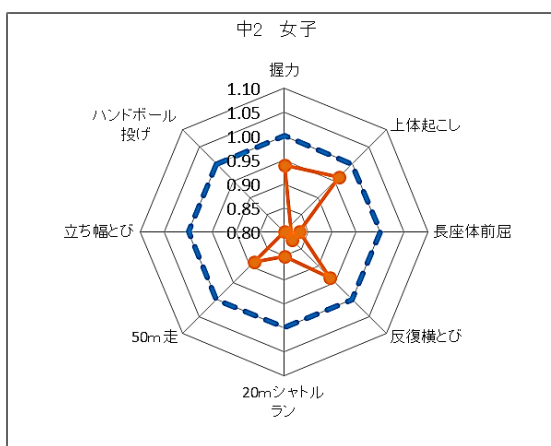
(2) 全国体力・運動能力、生活習慣調査

○●体力●○

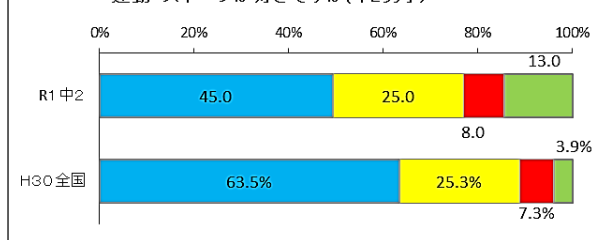
男子（中2）



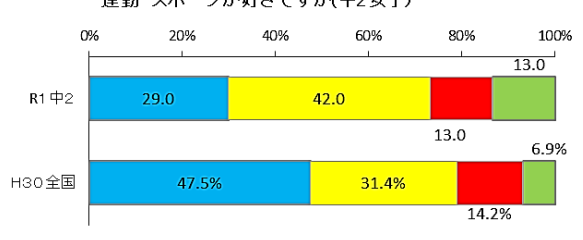
女子（中2）



運動・スポーツが好きですか(中2男子)



運動・スポーツが好きですか(中2女子)



分析

全国平均と比べると、男子は全種目で低い値となった。女子も男子同様低い値となった。男女とも長座体前屈とハンドボール投げで、値の低さが顕著にみられる。アンケートの結果では運動が『好き』『やや好き』と答える生徒が男子は70%、女子は71%と昨年度に比べて低くなっている。運動部や地域のスポーツクラブへの所属状況も全国平均を下回っている。運動に対して消極的な姿勢も見えるためこのような結果になっている。

取組み

今年度も意欲的に取り組めるよう、2, 3年生に関しては、新体力テスト実施前に昨年度の個人データを見せた。昨年度の記録を上回れるよう、頑張る生徒の様子も見られた。運動部に所属する生徒は多いが、種目によって苦手なものがあることがわかった。男子では柔軟性、女子では巧緻性、筋パワーを高める必要がある。保健体育の授業では補強運動を継続して行っているが、結果を踏まえて、運動内容を変える場面も必要と考えている。

- ① 生徒が主体的に学ぶことができるよう、引き続き授業づくりに取り組む。
- ② 体を動かすことの楽しさが味わえるよう、活動内容や方法を工夫する。
- ③ 技のポイントをわかりやすく伝え、意欲が低くならないよう努める。
- ④ 補強運動の内容を、主運動の内容によって工夫する。